



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

その子にしかできない学び方を

小学生になってからますますわがままぶりを発揮する甥っ子には、中学1年の姉と小学6年と4年の二人の兄がいる。6年の長兄は野球が大好きであり、仲間を率いて活発に活動する。これに反して4年の次兄は心優しい、弟思いの子だ。

心優しいというと聞こえはいいが、実のところ気が弱く、小学校に入るまでは、何かにつけて「こわい、こわい」「いやや、しいひん」と手を出そうとしなかった。そんな次兄に周囲の大人達、とりわけ両親は、「来年は小学校ダゾ！そんなこと言ってたら、学校の先生にしかられるよ！？」と、私の方をちらりと見ながら激励し続けていた。「小学校はそんな地獄のようなところじゃないからね」と言いたいところだが、親の意向を子どもの目の前でつぶすわけにもいかず、私としては「まあまあ」とその場をごまかすのが精一杯だった。そんな彼を見かねてか、長兄の野球大好き少年は「見とけよ、こうすんねん」といろんなことにチャレンジしていく。失敗してもくりかえしチャレンジする長兄と、できないからと言い訳をしつつ、兄のがんばりを恨めしく見守る次兄と、格差はますます広がるばかりだった。

近所の公園にみんなであそびに行ったときのこと、案の定、長兄はいろんな遊具に挑戦し、次兄はこわいからと兄にはついて行かず、歩き始めた末っ子の手をひいて、楽しめそうな遊具を紹介して回っていた。そこで繰り広げられるかわり合いは、相手の技量と興味に合わせたものだった。すばらしく教育的なのである。自分がこわい思いをしたためだろうか、急に末っ子を抱きかかえ、これ以上近寄ったらあかんと制止したり、ベンチによじのぼるようすをじっと見守ったりするのである。さっと先回りして手助けする姿、腕を組んで見守る姿は、なんともたのしいものだった。やがて、その次兄は、手本を見せようと、いつもは避けているジャングルジムに挑戦する一幕があった。世話をする相手に自分を重ね、自分が経験した「こわいこと」や「やりがい」といったものを総動員して、自らの可能性を切り拓いていくように、その二人は目に見えて伸び、とりわけ末っ子は長姉、長兄、次兄の庇護のもと、わが意のまま持てる力を伸ばしていくのである。

あれこれとチャレンジしないとできない、身につかないというのは確かなことである。しかしそれは、大人が指図し、命じれば、言われたとおりにチャレンジし、できるようになるという単純なものでは決してない。じっと見守ってもらい、待ってもらっている安心感や、気づかってもらう中で、新たな境地が切り拓かれていくという、なんともじれったいことなのである。どの子もその子にしかできない学び方で確実に大きくなったのもしくなっていくものだ。結果が出ていないからと難癖をつけたり、何かにつけてイライラしてしまったりする大人達に大切なことを教えてくれた思い出である。